

## 【日本山岳会関西支部登山教室開催の理念】

### 登山の歴史

古くから、高く深遠な山々は多くの人々によって遠くから遥拝されてきました。その後、役行者を始祖として修験道と呼ばれる山岳修行の場となり、日本各地の山が開山され厳しい修行が行われるようになりました。

わが国の大衆登山の始まりは庶民の生活水準が向上し始めた大正時代と言われ、多くの山岳書や山岳専門雑誌が創刊され、交通機関の発達も登山ブームに拍車をかけました。いわゆる第一次登山ブームの到来です。多くの大学では山岳部が設立され、血気盛んな若者たちがバリエーションルート開拓へ覇を競い、地方でも山岳会の設立が相次いだ時代です。

日本での近代登山は、登山家の榎有恒が大正 10 年（1921）にアイガー東山稜を初登攀してから急速に拡がりました。昭和に入るとさらに一般化し、若い女性も山登りを楽しむようになりました。とくに白馬岳、燕岳、槍ヶ岳などの高峰が連なる北アルプスは人気の的になりました。

登山ブームに拍車をかけたのは、昭和 31 年（1956）5 月 9 日のマナスル登頂でした。榎有恒を隊長とする日本の登山隊が、ヒマラヤの 8000m 峰マナスルの初登頂に成功。9 月にはその記録映画「マナスルに立つ」も公開され登山熱が高まりました。さらに「朝日新聞」に連載された、井上靖の小説「氷壁」が大評判となり、第二次登山ブームの拡大に拍車をかけました。ナイロンザイル切断事件を皮切りに、社会人山岳会の若者達が先鋭的な岩壁登攀や冬季登攀で切磋琢磨するようになり、腕試しにヨーロッパアルプスの岩壁へとでかけ、昭和 38 年のアイガー北壁挑戦を皮切りに、アイガー・グランドジョラス・マッターホルンの「アルプス 3 大北壁」の登攀ブームを巻き起こしました。当時、「3 大北壁」を登るためのトレーニングとして、ヨーロッパアルプスのスケールと環境を体感するために行われたのが、谷川岳や穂高など厳冬の岩壁の「継続登攀」でした。数日から 10 数日かかる登攀に必要なものは全て自分達の背中に背負って登攀する、いわゆる「アルパインスタイル」でおこなわれ、背負う荷物を少なくするためにツェルトや雪洞に寝泊りし、食料や燃料も制限されました。しかし、極寒・空腹・不快といった劣悪環境の体験は、ヨーロッパアルプスの背後に白く・高く聳えているヒマラヤへのバリエーションルートへ向かうのに必要な技術・体力を醸成したのです。

### 第三次登山ブーム

先鋭的な岩壁登攀やヒマラヤなどの海外の登山記録が山岳専門誌の紙面を賑わせる一方、昭和 40 年代からはバックパッキングやオートキャンプなどのアウトドアブームが到来し、先鋭的な登山はだんだんと影をひそめていきます。バブル経済が崩壊し、平成に入ると中高年登山者が増加し、百名山登山を中心とした第三次登山ブームが勃発しました。第三次登山ブームがそれまでの登山ブームと違う点は、「より困難な山登り」の追及ではなく、健康維持や精神の賦活を求めてという「癒し系」の登山であり、以前にも増して女性の参加

率が高いことです。また中高齢になってから山歩きをはじめの人達が多く、その目的も高峻山岳への挑戦ではなく、山の景観や動植物を見ながら、山麓や山腹を歩いて自然に親しみ、楽しむいわゆるトレッキングの比率が高まってきました。荷物はなるべく軽く、自分のペースで歩き、ピークにはかならずしもこだわらない、そして天気の悪い時には行動しないという特徴があります。さらに、山登りの仕方がわからない、家族が安心するからとツアーに参加することが常識となってきました。

#### さらに続く登山ブームと山岳遭難の増加

2000年も後半に入ると、中高年登山者に加えて30代から40代の女性登山者が増加してきました。また、長い間アウトドアショップなどで若い人たちへの自然回帰の浸透を図っていた出版社が、自然が好きで山に出かけたいという若い世代をターゲットにした『ランドネ』や『ピークス』を相次いで創刊し、ブームに火がつけました。「山スカ」に代表される山ガールファッションの大ブームとなりました。第四次登山ブームの勃発です。しかし、老若男女が山登りをする時代になって増えているのが山岳遭難です。警察庁が統計を取り始めた昭和36年に遭難者数は年間500人前後でしたが、95年頃から右肩のぼりとなり、1昨年は3000人を越えてしまいました。遭難の要因は道迷いが約40%、滑落や転倒が30%を超えさらに病気や疲労が続きます。いずれも体力トレーニング不足や、自分や同行者の健康状態や体調の変化を把握していないこと、地図やコンパスが使えないことなど、知識や技術の不足という初歩的な要因によるものと指摘されています。昨今増加しているツアー登山事故のように、「連れて行ってもらうから安全」という、他力本願的な登山にも問題があります。

#### 安全登山のために

山登りの楽しみは自ら登山計画を作り、周りの状況の変化に気を配りながら行動することにあります。しかし、地図や写真などの情報から登ってみたい山やルートを決め、ガイドブックや時刻表を参考に計画を練り上げ、その目標を安全に快適に登るために体力や技術の練成をおこなう本来の登山者は少なくなっています。最近では、ガイド登山や仲間に連れていってもらおう山登りであり、特に高齢や初心者だから、手軽さと安全を確保する手段として「ツアー登山」への依存が高まっていると言っても過言ではないでしょう。

また経験・体力・技術が無い、少ないことを理由に安全確保の方策として高機能の装備を買い求め、天気の悪い時や悪くなると予測される時には登らないという人達が増えています。体力・技術の養成と経験の積み重ねによる耐久力の強化という、本来必要な能力養成がなおざりにされている、本末転倒の時代となっています。

日常生活でも歩く距離がどんどん少なくなり、空調のいきとどいた生活が当たり前になって昔から比べると、身体能力、特に耐久力が低下しています。しかし、昨今のストレスの多い生活環境から、「自然との対峙」を楽しみたいという要求は今後ますます増加するこ

とが予想されます。

日本山岳会関西支部がおこなう「登山教室」は、単なる山案内ではなく、登山をより安全に、快適におこなうために最低限の知識や技術を現場で身につけていただくために行うものであり、激しく変化する自然の中での対応力強化を目的としています。

重廣恒夫